

2019年5月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

幸せを開く智慧

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含経典2』（ちくま学芸文庫）／実践に関する経典群／道相應／6分別

(2) 主題

聖なる八支の道の第一である、「正見」について、学んでみたいと思います。

2. 正見

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、いかなるをか正見というのであろうか。比丘たちよ、苦なるものを知ること、苦の生起を知ること、苦を滅することを知らること、苦の滅尽にいたる道を知ることがそれである。比丘たちよ、これを名づけて正見というのである」（増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 173）

(2) 正見

この経文では、次の四つを知ることが正見であると言っています。

苦なるものを知ること

苦の生起を知ること

苦を滅することを知らること

苦の滅尽にいたる道を知ること

すなわち、四つの聖諦を知ることが「正見」です。

(3) 正見の真意

正見とは、自分自身に対する正しい見方です。

そこで、四つの聖諦は、次のように理解するべきであると考えられます。

自分に生じている苦を知る。

自分の中にある苦の原因を知る。

自分の中にある苦の原因を滅すれば、苦が滅することを知らること。

自分の中にある苦の原因を滅するための修行の道を知る。

3. 無明

(1) 経文「分別（十二支縁起）」

「比丘たちよ、では、無明（無智）とはなんであらうか。比丘たちよ、苦についての無智、苦の生起についての無智、苦の滅尽についての無智、および苦の滅尽にいたる道についての無智である。比丘たちよ、これを無明というのである」（増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 132）

(2) 無明とは四つの聖諦についての無智

十二支縁起では、苦悩の根本原因は「無明」であるとしています。

「無明」とは、次の四つの無智です。

苦についての無智

苦の生起についての無智

苦の滅尽についての無智

苦の滅尽にいたる道についての無智

すなわち「四つの聖諦に対する無智」が、「無明」です。

(3) 無明を滅する

十二支縁起では、「無明」を滅することによって、苦悩を滅することができるとなっています。

「無明を滅する」とは「四つの聖諦に対する無智」を滅することで、「四つの聖諦」を知ることです。これは「正見」を得ることを意味しています。「正見」を得て、聖なる八支の道を修すれば、苦悩は無くなるのです。

4. 釈迦牟尼世尊が説いた教え

(1) 経文「申恕（シンサパー）」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、コーサンビー（憍賞弥）のシンサパー（申恕）林にましました。

その時、世尊は、その手にすこしばかりのシンサパーの葉をとって、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、汝らはいかに思うか。わたしが手にとっているすこしばかりのシンサパーの葉と、このうえのシンサパー林にあるそれと、いずれが多いであろうか」

「大徳よ、世尊がその手にとりたまえるシンサパーの葉はすくなく、このうえのシンサパー林にあるそれは多うございます」（増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 311～312）

(2) シンサパーの譬え

釈迦牟尼世尊は修行者たちと共に、コーサンビーという国にある、シンサパーという樹木の林にいました。

釈迦牟尼世尊は、手を伸ばして、シンサパーの葉を数枚採りました。修行者たちにその葉を見せながら問いかけました。

「私の手にある葉と、この林にある葉と、どちらが多いですか？」

修行者たちは答えました。

「それはもう、林にある葉のほうが、ずっと多いです」

釈迦牟尼世尊は、にっこりとうなずき、お話を続けます。

(3) 経文「申恕（シンサパー）」

「比丘たちよ、それとおなじように、わたしが証知して、しかも、汝らに説かざるところは多くして、説けるところは少いのである。比丘たちよ、では、なにゆえに、わたしは、それらを説かなかったのであろうか。比丘たちよ、それは役に立たず、梵行のはじめともならず、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃にも資することがない。そのゆえに、わたしは説かないのである」(同書、p. 312)

(4) 説かないことが多い

釈迦牟尼世尊は、はかり知れない悟りを得たのですが、そのほとんどをお説きにならなかったというのです。どうして説かないのかと言えば、苦悩を離れる役にも立たず、悟りを得る役にも立たないからでした。

(5) 経文「申恕（シンサパー）」

「比丘たちよ、では、わたしは、何を説いたであろうか。比丘たちよ、〈こは苦なり〉とわたしは説いた。〈こは苦の生起なり〉とわたしは説いた。〈こは苦の滅尽なり〉とわたしは説いた。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉とわたしは説いた。比丘たちよ、では、なにゆえに、わたしは、それらを説いたであろうか。比丘たちよ、それは役に立ち、梵行のはじめとなり、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に資するからである。そのゆえに、わたしは説いたのである」(同書、p. 312)

(6) 説法の核心

釈迦牟尼世尊は、次のように述べました。

「私は、あなたがたに〈これが苦である〉〈これが苦の原因である〉〈苦の原因を滅すれば苦が滅する〉〈苦の原因を滅する道は八支の聖道である〉と説きました」

釈迦牟尼世尊が説いた教えは「四つの聖諦」と「八支の聖道」でした。

(7) 少しだけ説いた

釈迦牟尼世尊は、はかりしれない悟りの中から、ほんの少しだけお説きになりました。それが「四つの聖諦」と「八支の聖道」でした。

どうして説いたのかと言えば、苦悩を離れる役にも立ち、悟りを得る役にも立つからでした。

(8) 経文「申恕（シンサパー）」

「されば、比丘たちよ、〈こは苦なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである」(増谷文雄著『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 311～313)

(9) 四つの聖諦を実践してください

釈迦牟尼世尊は、修行者たちに、「四つの聖諦を熱心に学び、熱心に実践してください」と勧めました。

5. 役に立つ

(1) 経文「申恕 (シンサパー)」

「比丘たちよ、それは役に立ち、梵行のはじめとなり、厭離・離貪・滅尽・寂静・証智・等覚・涅槃に資するからである。そのゆえに、わたしは説いたのである」（再掲）

(2) 苦の滅から涅槃へ

ここに、四つの聖諦が、どのように役立つかが順を追って述べられています。

梵行	「梵行」とは「浄らかな行い（貪欲・瞋恚・愚痴の混じらない行い）」です。 四つの聖諦を学び、実践することによって、梵行に入ることができるのです。
厭離	貪欲・瞋恚・愚痴を厭い、離れようと努力します。
離貪	貪欲・瞋恚・愚痴から離れることができます。
滅尽	貪欲・瞋恚・愚痴を滅し尽くします。これによって、苦悩が無くなります。
寂静	貪欲・瞋恚・愚痴があると、常に心が立ち騒いでいますが、これらを滅尽したので、心は平静を保ち続けます。苦悩の無い幸福な境地に入ったのです。
証智	智を証するのですから、悟りの境地に足を踏み入れたということでありましょう。
等覚	「等覚」は「正等覚」で、正しい智慧を得たということです。
涅槃	「涅槃」は、あらゆる迷いを滅し尽くした境地で「解脱」とも言います。

(3) 「正見」の意義

四つの聖諦は、苦悩から脱し、幸福を得、さらに苦悩・幸福を超えた涅槃の境地にいたる道筋をつけてくれます。

「正見」によって、この道筋をたどり、これらの功德を得る修行に入ることができるのです。

6. 六大煩悩

正見を妨げる迷いとして、六大煩悩があります。

(1) 貪・瞋・痴

激しい執着心から生じる貪欲は、強い自己中心の言動を生みます。

これによって、智慧が覆われ、愚痴となります。

貪欲が満たされなければ、瞋恚を起こします。

貪欲・瞋恚・愚痴は迷いの根本といわれ、正見を妨げます。

(2) 慢

自分に対する執着心から、自分は他者から優越しているものと思ひ込みます。

この優越感によって、釈迦牟尼世尊の教えも卑下し、顧みようとしません。

(3) 疑

「疑(ぎ)」とは、正しい教えを疑うことです。自分の都合に合わないからであります。

「疑」の迷いのある人は、「四つの聖諦」をはじめとする、釈迦牟尼世尊の教えを疑います。

(4) 悪見

六大煩惱のひとつに「悪見」があります。悪見には五種類あるとされます。

① 有身見(うしんけん)

自分の心身に対して錯誤を生じることです。

この心身は自分のものである。この心身の奥に本当の自分がある。この心身は永遠に存在する。こうした錯誤があるので、真の自分を見ることができません。

② 辺執見(へんしつけん)

自分は無くならないという思いに執着して怠惰な生き方に陥ってしまったり、死ねばそれっきりだという思いに執着して捨て鉢な生き方をしたりしてしまいます。

③ 邪見

「邪見」は、原因・結果の関係を頭から否定するものの見方です。原因・結果の関係を説く「四つの聖諦」も否定します

④ 見趣

自分を最高だと思ひ込んで他を否定する迷いです。釈迦牟尼世尊の教えも頭から否定します。

⑤ 戒禁取

「戒(かい)」とは「こうしなさい」と命じることであり、「禁(ごん)」とは「こうしてはならない」と禁じることです。「取(しゅ)」とは、強く執着することです。

あやしげな宗教とか、言い伝えとかが、理に合わない「戒」やら「禁」やらを示しますと、これを信じた人びとが、これに執着して守ろうとします。これが「戒禁取」です。

このような精神でいる限り、四つの聖諦を理解することも、実践することもできません。

7. そのほかの迷い

(1) 無慚・無愧

「無慚(むざん)」は「非難されるようなことをした自分を、恥ずかしいと思わないこと」、

「無愧(むぎ)」は、「非難されるようなことをしたのに、社会に対して恥ずかしいと思わないこと」と、説明されています。

このような精神では、正しい教えで自分を振り返ろうなどとは思わないでしょう。

(2) 不信

「不信(ふしん)」は、正しい教えを信じないことです。四つの聖諦も、信じようとしません。

(3) 懈怠

「懈怠(けたい)」は、すべきことだと分かっているもしないことです。逆に、してはならないことだと分かっているもすることです。

懈怠の心では、四つの聖諦を学ぶべきだと分かっているも、学ぼうとしません。四つの聖諦を実践すべきだと分かっているも、実践しません。

(4) 放逸

「放逸(ほういつ)」は、善いと分かっているも実践せず、悪いと分かっているも行ってしまうことです。

放逸の心では、四つの聖諦が正しい教えであることは分かっているも、これを学ぼうとせず、理解しようとして、実践しようとしません。

8. 「正見」を得る道

自分の中にあるこれらの障害を越えて、「正見」を得る道は、「自灯明・法灯明」の実践に尽きると思います。「八支の聖道」においては、「正念」の修行として説かれていますので、そこで詳しく学びたいと思います。

要約して言えば、「法を学んだ眼で自分を観察し、法から外れているところを発見したら、法に沿って直していく」という修行を、ひたすら繰り返すことです。

自分の中にあるさまざまな障害が、この修行の邪魔をしますが、それに負けることなく修行を続けるほか、道はありません。